



なぜか？

The Reason Why

R.A.レイドゥロー著

**The Reason
Why**

by

R. A. LAIDLAW

Publishers

GOSPEL TRACT PUBLICATIONS

Glasgow, Scotland

Evangelical Publishers

Tokyo, Japan

なぜか？

ある青年が百万円もするダイヤの指輪を恋人にプレゼントしたとしましょう。彼は、その指輪を、サービスしてもらったビロード製の小箱に入れて贈ることにしました。ところが、数日後、彼女がいきなり次のように言ったとしたら、その青年はどんな気持ちになるでしょうか。「あの小箱はとでもすてきだわ。本当にありがとう。傷つかないよう、大切にするわ」。

これは確かにばかげた話ですが、私たちも同じように愚かなことをしているのではないのでしょうか。自分のからだのことがばかり考え、そのただけに時間を費やしてはいないでしょうか。からだは先ほどの「小箱」のようなものにすぎません。けれども、その中には、本当の自分——たましい——が宿っているのです。たましいは、大きな価値がある宝石の

ようなものです。イエス・キリストが私たちのたましいを非常に重んじてくださったからです。イエス・キリストは何が価値あるものであるか、よくご存じのお方ですが、その方がご自分のいのちを捨ててまで、そのたましいを救う価値があると考えてくださったのです。もつとも、あなたはこれまで、このようなことをあまり深くお考えになったことがないかもしれません。

この本をまじめに、何よりも正直な気持ちで読んでくださるよう、お願いします。ご自分とご自分の未来を大切にし、この機会によく考えていただきたいのです。

本書を最後までお読みください。今こそ、「恵みの時」、「救いの日」だからです（IIコリント六・2）。期日や時間に遅れ、取り返しがつかなくなることは、しばしばあります。たましいの問題をないがしろにするなら、永遠の幸いを失うことになるのです。それは昔も今も、これからも変わりません。それにもかかわらず、多くの人が（そのほかの点では聡明で思慮深いにもかかわらず）恐ろしい危険を冒しています。「時間ならたっぷりあるさ」といった、ほとんど自滅的とも言えるような口実をもうけて、最も重要な問題につい

て考えることを先延ばしにするのですから。

私たちはみな永遠の世界に行くことになるのですが、そのことについて話すと、たいいての若者は次のように答えます。「また、気が向いたときにでも、ゆっくり考えてみようかな」。けれども、中年の人からも、年老いた白髪の人からさえも、やはり同じような答えが返ってくるのです。「いずれ、そのうちに……」。

けれども、「死」は情け容赦のない怪物です。その恐るべき力を正しく理解するだけで、死に対する態度は一変してしまうことでしょう。毎日、この地球上で、いったい何人の人が死を迎えるのでしょうか。人口何十万人かの町が、毎日ひとつずつ、永遠の世界へ消え去るようなものです。時計がカチカチと秒を刻むごとに、間違いなく、何人もの人が死んでいるのです。こう考えると、死の力というものが痛切に感じられるのではないのでしょうか。あなたが一時間かけてこの本を読み終えたとしたら、そのときには、いったい何人の人がこの世を去っているでしょうか。まことの神に会うために……。

十二歳のとき、私は死を強く意識しました。死が私の家にやって来て、愛する祖母を奪い去ったのです（私は幼児のころも、小学生のころも祖母の世話になりました）。大好き

だった祖母の顔が、じっとして動かなかったことを覚えています。祖母は静かに横たわり、年老いた顔は大理石のように白く、冷たくなっていました。いつか自分も同じように死んで冷たくなることは知っていましたが、私には死への備えができていませんでした。

しかし、今の私には備えができています。それは、私が何かをしたからではなく、主イエス・キリストを信じたからです。キリストが私の罪のために死なれ、私が義と認められるためによりみがえられたことを信じたからです。なぜ私が主イエス・キリストを救い主として受け入れたのか、できるかぎり簡単にお伝えしたいと思います。

次の順序にしたがって、ともに考えてみましょう。

- (1) 天地万物を創造された、唯一まことの神がおられます。
- (2) 私たちはみなひとり残らず神の御前みまえに罪人つみびとです。
- (3) 人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっています（ヘブル九・27）。

(4) 神は私たちのために救いを備えてくださいました。私たちはその救いのご計画を理

解することができます。



天地万物を創造された、唯一の、まことの神がおられるということは、どうすれば分かるのでしょうか。

聖書には次のように記されています。「(人々は) 神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなつた」(ローマー・21)。つまり、人は、神がおられることを生まれながら自覚していると言えます。ですから、神の存在を信じたくないために、いくら理屈をこねてみたところで、「神は本当はおられるのだ」という意識が心のどこかに残っているはずで、とても愉快なひとときを過ごしたり、友だちと大騒ぎをしたあとの静けさの中で、あなたも同じような経験をされたことがあるでしょう。人はみな違った状況のもとで暮らしていますが、昔

も今も、さまざまな宗教を追い求めていきます。心のうちでささやく、宗教心という名の、あの小さな声を静めるために、自分に都合のよい神や仏を信じているのです。

できるかぎり理論的に考えてみましょう。あなたと私が大きなビルの前に立っているとしましょう。私が必要な次のように話しかけます。「高層ビルが建つためには、緻密な設計図が必要だと考えられています、そうではありません。ある日、突然、鉄筋コンクリートが地面の中から現れ、それが、ある神秘的なプロセスで徐々にこのような姿になりました。外壁も窓のガラスも、そのあとで自然にできあがったものです」。

あなたは私を精神異常者とみなし、無意味なおしゃべりをそれ以上聞こうとはなさらないでしょう。それが偶然の結果ではなく、人が意図したものであることを知っておられるからです。何か設計された物があれば、それを設計した人がおり、デザインされた物があれば、それをデザインした人がいるはずです。この話の高層ビルのように、人が考え出し、人の手によって造られた物を見れば、「それは偶然できあがったものだ」と言われても、あなたはそれを信じようとはなさらないでしょう。

それにもかかわらず、ある人々は、この宇宙が偶然の積み重ねによってできたのだと信じています。この太陽系も、もとの星雲状態から徐々に発展したものだと言っているのです。彼らは自然界は知っていますが、創造主なる神は知らないのです。

一方、神は宇宙を超越したお方であると信じている人々もいます。神の本性はほんせいこの大自然の中に示されています。自然界の法則やさまざまな原理は神の御力を示していますが、神ご自身は本質的にこの大自然を超えて存在なさるお方です。デザインがあるのに、それをデザインした者がいないなどということが考えられるでしょうか。造られた物があるのですから、造り主がおられるはずで、結果があるということは、原因もあるのです。そう考えなければ、ジレンマに陥ってしまいます。それなのに、彼らは次のように尋ねるのです。「もし神が第一原因だとしたら、すなわち、造り主なる神が天地万物を創造したと云うのなら、その神はいったいだれが創造したのですか」。このような質問は矛盾していません。「いかなる原因も第一原因を生み出すことはできない」というのは明らかであり、もしそうでなければ、その第一原因自体が第二原因となってしまうのです。それは数学的に不可能なことです。

なぜか？

思慮深い人なら、この自然界に一連の因果関係があることを信じておられるはずで、何らかの結果があれば、今度はそれが原因となって、別の結果が生みだされます。ですから、「ひと続きのものには必ず起源がある」ということを認めざるを得ません。すなわち、第一原因がなければ、第一結果もなかったはずで、私は、この第一原因とは神にほかならないと信じています。この第一原因がどこから来たのか、私には分かりませんが、だからといって、神の存在を否定しようとは思いません。でなければ、無数に存在する結果も否定することになるからです。それらの結果が偶然この世界に生じたということになってしまふからです。お分かりのように、ある原因がかって存在したとすれば、どうしても、「第一原因である神がおられる」という結論に達するのです。

電気は熱源や動力源として広く利用されていますが、電気そのものを実際に見た人はひとりもいません。それでは、なぜ私たちは電気の存在を信じているのでしょうか。家の中や町の中で、毎日、電気の現象を目にしているからです。「電気の現れ」と同様、私たちは、周囲の至る所に「神の現れ」を見ています。太陽、月、星、美しい植物や動物、山や川といった、この大自然。そして、人間の驚くべきさまざまな機能……。ですから、神が